人格形成を規定する要因分析（IV）

― 家庭における文化的環境要因の変化が性格形成に及ぼす影響について ―

The Study of Psychological Factors Effecting on the Development of Personality.

― On the effecting of the change of the domestic cultures on the achievement in Y-G Test ―

高　橋　正　臣

Masaomi Takahashi

Abstract

This research is the fourth part of "The Study of Psychological Factors Effecting on the Development of Personality".

The purpose of this study is to define how the change of domestic cultures in home effects on personality building. The following results could be obtained by the research of the relation between "achievement in Y-G Test" and "the change of the domestic cultures–the transition from 'the book culture' to 'the TV culture'".

1. Achievement mark of "R" factor in Y-G Test is getting higher according to the temporal change of cultures–from the book culture to the TV culture (visual and figure culture). And this tendency is much more to the subjects majoring in music than majoring in arts.

2. There is the temporal change in achievement mark of other factors (I・G・R・S) in Y-G Test which are not in prospect. Whether this fact of the change results from the change of the domestic cultures in home is not able to be predicted only by this research.

I　研究目的

性格形成の規定要因に関しては，遺伝を主体とする生得説や，環境における経験と学習を主体とする経験説から，性格形成の規定を遺伝，環境の対極性の度合として輻輳的にとらえたA・ルクセンブルガーの説を巧妙に図式化した高木正孝（1，2）の説明に至っていることは周知のことである。

そして，性格の構造上，遺伝的・生得的度合が強く影響する領域としては，深層人格に属する情動面があげられているが(3，4)，大脳生理学の研究がすすむにつれて，このことは一層明確化されている（5，6）。

一方，性格形成における後天的な環境要因としては，親子・兄弟等の人間関係要因，社会経済的要因，文化的要因等を主体とする家庭環境要因や，学校・地域社会・文化民族的な要因を主体とする社会的・風土的要因があげられる（7，8，9，10)。

本研究においては，気質に準ずるほどの性格の基本的・深層的形態を構成する乳幼児・児童初期の性格形成における家庭的環境要因のうち，家庭における文化的要因の時代的変化をとりあげ，それが性格

形成とどのような関連にあるかを，次の仮説の検証を通して明らかにしようとした。

仮　説：

1．家庭における性格形成の文化的規定要因を，時代的変化として巨視的にとらえるならば，昭和28年のＮＨＫのテレビ放送を契機として，「活字文化」より「映像文化」への転換という典型的な文化の位相の変化としてみることができる。とするならば，この家庭における文化の時代的変移は，その性格形成上の規定力からみて，当然，性格特性の時代的変化を生じさせるであろう。

2．このことは，視覚文化を専攻するもの（美術専攻学生）と，聴覚文化を専攻するもの（音楽専攻学生）との間に，映像文化の受けとり方の相違をうみ，従って両者の間に，性格特性上の相違を生じさせはしないか。

II　研究手続

1．研究方法

Ｙ－Ｇ性格検査の実施。映像文化の実態調査。

2．検査実施時期と研究対象

(1)　検査実施時期及び研究対象は表１のとおりであるが，どの年度も実施の時期は，大学入学後，半年から１年以内の期間である。

(2)　研究対象者は，すべて美術・音楽専攻の芸術短期大学女子学生の教職科目受講者（当該年度の全学生の約75％～90％）である（男子学生は人数が少ないため，統計的資料としてたえないので，資料対象より除いた）。

(3)　比較群に属する対象者の生年は，昭和20年～24年であり，対象群のそれは，昭和34年～37年である。比較群と対象群の群化の根拠は，映像文化（テレビ文化）の中で乳幼児・児童期前期を生育したもの（対象群）と，その影響を未だ受けず，活字文化の中で同時期を生育したもの（比較群）とに区分したことによる（詳細は，「結果と考察」を参照）。

なお，資料の相対的比較のため，Ｙ－Ｇ検査標準化において用いられたＹ－Ｇ検査一般女子大学生Ｙ－Ｇ検査得点（21）を「統制群」とした。

III　結果と考察

1．結果と考察にはいる前に，まず次の諸点を明らかにしておきたい。

(1)　性格形成を規定する家庭環境要因の１つである文化的要因の変移を，「活字文化」より「映像文化」への変移の位相からとらえた理由。

性格形成における家庭の文化的環境要因の研究対象としては，従来「しつけの syntality」が主にとりあげられ，現在までに，すでに数多くの研究成果があげられてきた（R.B.Cattel, H.Champney, M.J. Radke, A.L.Baldwin, P.M.Symonds 等）(11), (12)。

ところで「しつけのシンタリティ」以外の家庭の文化的環境要因として研究対象にあげられるものは，〝両親を主体とする文化的 syntality・家庭内での遊び（最近は特にマイコンゲーム）・ステレオ・ラジオ・カセット・マンガ〟等が考えられる。しかし，それらを家庭文化の時代的変移の位相という面から，性格形成の規定要因として科学的，統計的に質的・量的にその規定度を解明していくのは，かなり困難である。

これに対し，活字文化から映像文化への変移に関して，文化の質の変化については，昭和28年２月のＮＨＫテレビ放送開始以後，徐々に子どもの生活へ与えてきたテレビの影響度を重視した文部省が１ヶ年にわたって行なった「テレビジョン影響調査・昭和34年」を発表(13)して以来，教育学的，社会学的，心理学的等の面から急速に研究がすすめられ(13, 14, 15)文化の量的変化については生活時間，視聴時間，刺激内容及びその種類等にその変移をとらえること

表１　研究対象

（数字は人数）

専攻別＼群別・年度別	比較群				対象群			
	昭和40年	41年	42年	計	昭和54年	55年	56年	計
美　術	60	82	81	223	74	80	84	238
音　楽	34	36	43	113	54	57	55	166
全	94	118	124	336	128	137	139	404

が可能である。

従って本研究においては，人格形成と関連して，家庭における性格形成規定要因としての「活字文化」および，「映像文化」をとりあげてみた。

⑵　活字文化と映像文化（テレビ文化）が性格形成に及ぼす心理的メカニズムと，その相違点について。

A．〔映像文化と心理的メカニズム〕

南博はテレビによる映像文化とパーソナリティーとのかかわりについて，「テレビによる人間変革は，まず，パーソナリティー形成の過程にあらわれる。パーソナリティー形成とは，こどものパーソナリティーが成長につれて，構造と機能の上で，しだいに分化し，同時に統合されていくことである。そうして，この分化と統合に際して，こどもが周囲の環境から受けるさまざまな心理的影響の主力は，幼年期に家庭内で経験する心理関係にあると考えられる。」⑰と述べ，昭和35年にすでにテレビによる人間変革を強調し，テレビの家庭内における心理的関係の役割りの大きさを強調している。

今日，性格形成における幼児期の家庭環境要因のもつ比重の大きさについては常識化さえされているが，それだけに人間変革の主体となっているテレビの映像文化が心理的に影響を与えるメカニズムを，活字文化と比較しながら明らかにしておくことは，本研究においては欠くことができない。

南博は，テレビの映像刺激とこれに対する人間の反応様式のメカニズムについて，映像文化のもつ特有の特性を次のようにあげている。「ふつう，テレビ・コミュニケーションの送り内容は，映像に乗せられて，受け手の感覚器官に達する，といわれている。このばあい，テレビ映像では，視覚，聴覚の刺激材料から成り立つ静止画像，運動画像，活字像，音像の四つが組み合わされている。…右のような映像から成るテレビの送り内容は，こどものパーソナリティー形成に当って，パーソナルな保護者が送り出すコミュニケーション内容にくらべて，次のような質の相違をもっている。テレビの送り内容は，保護者のことばとちがって，パーソナルでない媒体から送られる。そこには，人間と人間の心理関係はなく，映像の刺激が外部から人間の内部に変化をひきおこす，触発関係がある。」(17，18)と述べ，映像刺激の〝触発性〟を強調している。

確かに，テレビによる外的情報の認知過程の心理的メカニズムを解明していくと，〝感覚的触発性〟をもっともその特徴としているようである。

つまり，南博のいう先述のテレビの4つの視的，聴覚的情報としての刺激が人間の受容器官に送られてきた場合，受容された情報は，「感覚」から瞬間的思考過程を経て「瞬間的認知」に至る。そこには，外的刺激の客観的認知と，個性的・人格的認知の間の時間的差違は許されず，客観的認知，即個性的・人格的認知を強いられ，十分な時間をかけての知的，経験的適応のはいりこむ余地はない。

従って，一般に図式化されている，刺激→感覚→知覚→認知という認知の心理的過程について，感覚から認知までの間における刺激の再確認や，感覚↔知覚→認知間のフィードバック（思考）は許されないのである。

しかも，テレビを通じて与えられる情報は瞬時にして変化していくため，刺激に対してそのような時間的余地を必要とする認知習慣－〔(刺激↔知覚）のフィードバックのくり返し→認知〕－しか身についていないもの（徹底して活字文化の中で生育してきたような老人など）は，テレビによる情報認知にはついていけないのである。

従って，テレビの4つの映像刺激は，瞬間的感覚的反応を要求するため，個体は，思考反応よりもむしろ瞬間的反応として対応しやすい快，不快を主体とする情緒的反応形態をとらざるをえなくなる。

さらに，テレビ文化による家庭内での親子の対話の減少は，一層この傾向を強めている。

乳幼児期における保護者と幼児の対話を通してのコミュニケーションでの認知過程では，保護者（特に母親）は自分の与える情報（刺激）に対する幼児の認知の度合を十分確認しながら，必要とあれば何度でもスタートの情報（刺激）にフィードバックして情報を幼児の認知能力に対応させて変化させていく。

南博は，この関係を次のように述べている，「心理関係のシンボルでは，保護者の送るコミュニケーション内容は，あらかじめこどもに向けて考慮された，特定のものがえらばれているのが，ふつうである。それは，こどものパーソナリティー形成に意図的に

向けられた，コミュニケーションである。賞も罰も，愛も憎しみも，こどものパーソナリティーに，なんらかの影響を与えるために，あらかじめ配慮されているのである。」(17)と。

幼児自体も認知が十分に満足できない場合は，情報の再確認や不明な点の解明（質問）を試み，刺激→感覚→知覚間のフィードバックをくり返しながら（思考）自己の満足する認知へ達しようとする。つまり親子の対話の中には「刺激と認知」間にフィードバックのメカニズムが存在（このメカニズムを成立させるために絶対必要なものは〝時間〟であるが）しており，この心理的メカニズムこそ，上記の南博の指摘する－人間と人間の心理関係－なのである。

母親と幼児がともどもにテレビのブラウン管をながめることによって親子の対話が減少し，(すでにテレビ人間化した若い母親はテレビをかけっぱなしで育児をする)，映像文化への適応様式を極端に身につけざるをえない家庭環境条件下では，親子の対話を通してのみ形成される反応様式とは全く異なった反応様式が形成されてくるわけである。

映像文化に対する以上のような感覚的認知様式の継続的経験は，心理的に外的情報に対する感覚的に鋭敏な，情緒的反応に偏った人格（いわゆる〝感覚人間〟）を形成する。すなわち感覚的，情緒的に鋭敏な反応様式は，性格特性としては，活動的で好奇心は旺盛だが，思考様式の単純な，調子に乗りすぎて軽薄な衝動的行動傾向となると考えられるのである。

B.〔活字文化と心理的メカニズム〕

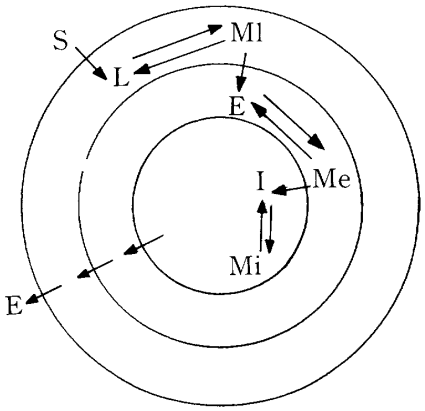
活字刺激の場合は，まず読書材料としての言語記号（外的刺激）の存在があり，これを読み手の刺激受容器官の視覚が受け入れ，読み手の言語能力体系に照らして容観的，辞書的に認知し（言語的意味づけ），次に彼のもつ知的，経験的体系を動員して経験的認知（意味）を成立させ，さらにこれが自我体系を発達させて個性（パーソナリティーの個人的特性）を強めていくという心理的過程をたどる。

読書のこの心理的メカニズムを，阪本一郎は次のように「読書の人格的適応」としてその図式化をとおして，まことに的確に説明している(19)。

「読書行動の主体としてのパースナリティーの構造を形式的に分析すると，図のようになる。すなわち，もっとも表層は言語能力体系（L：language organization）の領域であって，これに外部から言語刺激（S）が加えられると，それに言語的意味（Ml：linguistic meaning）が成立する。そしてMlはLに編入され個人の言語体系を発達させる。……次いでこのMlは，中間層の経験体系（E：experience organization）の刺激となって，そこに経験的意味（Me：experience meaning）を成立させる。このMeはEに編入されて，彼の経験体系をいっそう発達させる。……

さて，個人の言語体系および経験体系を統一している自我の体系（I：I organization）がその深層にあると考えられる。

MeがこのIの刺激となると，Iにはこれに対する個人的意味（Mi：I meaning）が現われ，これが自我体系をますます発達させて，彼の個性（パースナリティの個人的特性）を強化する。



パースナリティの読書適応（坂本）

しかし，すこし補説しなければならないようである。個人が第二次の位相で把握した経験的（文化的）意味は，その位相では主観性が禁止される傾向がつよく，なるべく高い文化価値を経験するように心構えられるが，それが自我領域への刺激となった場合は，もはやそのような拘束を超越する。個人は，読書材料から生産した意味を，彼個人の自我の思うままに個性化してよいのである。例えば今ここに乃木大将の伝記があるとして，大将の最期の殉死の意味を，当時の忠君体制の中に生きた軍人の生き方として客観的に理解することは重要であるが，その意味を自分の自我領域との接点内で捕えるときは，それをナンセンスと解しようと，尊敬すべき行為と受け取ろ

うと，そのほかどのような意味に理解しようと，読む者の自由なのである。」

以上のような読書の心理的メカニズムは，親子の対話が直接的経験であるのに対し，間接的経験であるという相違はあるものの，刺激↔認知間のフィードバック機制は全く同一である。むしろ読書刺激の場合のほうが，親子の対話より阪本のいう個人的意味化による自我体系の発展を相手の意思による刺激の変化にわずらわされないという意味で，時間をかけてより自由に個性的に行なえるともいえる。

活字刺激に対する認知講造は，言語的意味化→経験的意味化→個性的意味化（＝個性の強化）という過程をたどるが，満足のいく認知に達する過程ではスタートまでもどるか否かは別にして，つまり段階の差異はあるものの常にフィードバック機制が働き，このフィードバック機制こそ〝思考そのもの〟であり，活字文化はこの機制を心理的特性とするパーソナリティを形成する。

従って活字文化に対する以上のような思考的認知様式の継続的経験は，心理的に外的情報に対する瞬間的な反応を抑える反復思考的人格（いわゆる〝思考人間〟）すなわち，性格特性としては，慎重で考慮深く，軽卒さは少ないが一面考えすぎて決断の時を失し，外的情報に対する瞬間的感覚的反応の弱い，たてまえに流れて行動力に欠く行動傾向を生じると思われる。

(3) テレビの普及率と視聴時間

家庭におけるテレビ文化の影響を受けてきた科学的根拠としては，主として(a)テレビの普及率，(b)テレビの視聴時間，(c)テレビ情報の内容（番組）から説明できるが，今回は，(a)，(b)による。

家庭文化の影響を人格形成上もっとも強く受ける期間を，時実利彦の大脳生理学的に脳の発達の位相から考慮した場合，出産より10才前後までとすれば（5，6），本研究における比較群(生年，昭和20年～24年）が生後10年の年代は，昭和30年～34年である。

そしてこの当時のテレビの普及率は，表2が示すように，彼らが幼児期の7才では0.01%であり，ましてや昭和34年でも，23.1%である。テレビのこの普及率からみた場合，比較群は乳幼時期はもちろん，10才までにほとんどテレビ文化の影響を受けてこなかったといってもよかろう。従って視聴時間は問題にならない。

これに対し，対象群の10才までのテレビ文化の影響はどうであろうか。

対象群の生年が34年～37年であるため，生年時にすでにテレビの普及率は50%を超え(昭和37年，64.8%)，10才時の昭和47年には，87%に達しているのである。

しかも視聴時間は表3が示すように，昭和40年以後は，確実に平日は2時間以上，土・日曜日は1日に3時間以上にも上っている。

表2　テレビ放送受信契約〈放送開始以降各年度別の増減数・現在数・普及率〉（昭27～50年度）

	年　度	増減数	現在数	普及率(%)
テレビ契約	放送開始当時		(866)	
	昭和27	1,485	1,485	0.01
	28	15,294	16,779	0.1
	29	36,103	52,882	0.3
	30	112,784	165,666	0.9
	31	253,698	419,364	2.3
	32	489,346	908,710	5.1
	33	1,073,669	1,982,379	11.0
	34	2,166,304	4,148,683	23.1
	35	2,711,789	6,860,472	33.2
	36	3,361,644	10,222,116	49.5
契約甲	37	3,156,857	13,378,973	64.8
	38	2,283,948	15,662,921	75.9
	39	1,469,169	17,132,090	83.0
	40	1,092,123	18,224,213	75.6
	41	1,022,329	19,246,542	79.8
	42	1,023,945	20,270,487	84.2
普通・カラー契約合計	43	950,246	21,220,733	88.1
	44	866,815	22,087,548	91.7
	45	731,019	22,818,567	94.8
	46	701,687	23,520,254	84.4
	47	913,209	24,433,463	87.0
	48	491,522	24,924,985	88.7
	49	828,411	25,753,396	91.7
	50	791,362	26,544,758	82.6

注．普及率(%)
昭和27～29年度は昭和25年10月の国勢調査世帯数(16,580,129)
昭和30～34年度は昭和30年10月　〃　(17,959,923)
昭和35～39年度は昭和35年10月　〃　(20,656,234)
昭和40～45年度は昭和40年10月　〃　(24,081,803)
昭和46～49年度は昭和45年10月　〃　(28,093,012)
昭和50年度は　昭和50年10月　〃　(32,143,748)
により，それぞれ算出した。ただし，50年度は概数。

表3　テレビ視聴時間の変化　NHK国民生活時間調査（昭40，45，48，50）

	平日				土曜				日曜			
	40年	45年	48年	50年	40年	45年	48年	50年	40年	45年	48年	50年
	時間 分	時間 分	時間 分	時間 分	時間 分	時間 分	時間 分	時間 分	時間 分	時間 分	時間 分	時間 分
全国民	2.52	3.05	3.13	3.19	3.01	3.07	3.26	3.44	3.41	3.46	4.07	4.11
10～15歳	**2.22**	**2.06**	**2.19**	**2.11**	**2.57**	**2.53**	**3.01**	**3.09**	**3.54**	**3.42**	**3.54**	**3.44**
16～19歳	2.10	2.15	2.17	2.17	2.31	2.36	2.56	2.55	3.38	3.24	3.50	3.49
20代	2.52	2.53	3.07	3.09	2.51	2.50	3.08	3.29	3.38	3.28	3.58	4.05
30代	3.06	3.13	3.11	3.22	3.02	2.58	3.24	3.49	3.33	3.42	4.04	4.06
40代	2.59	3.07	3.20	3.19	3.05	3.07	3.21	3.46	3.30	3.43	4.01	4.13
50代	3.16	3.34	3.41	3.53	3.17	3.38	3.46	4.09	4.05	4.17	4.17	4.31
60代	3.16	4.01	4.13	4.18	3.26	3.52	4.22	4.45	3.29	4.20	4.47	4.57
70歳以上	2.46	4.11	4.21	4.38	3.11	4.05	4.31	4.27	3.26	4.07	4.42	4.43

表4の1　テレビの視聴時間

	小6			中2		
	全	性		全	性	
		男	女		男	女
	832人	418人	414人	820人	431人	389人
1時間未満	5%	3%	7%	7%	6%	7%
1時間以上～2時間未満	20	15	25	27	27	27
2時間以上～3時間未満	28	31	26	33	32	34
3時間以上～4時間未満	23	26	21	20	20	20
4時間以上	21	24	18	13	14	11

表4の2　子どもの生活時間（小・中学生）

1975年（昭和50年）10月

行動の種類	小学生（10歳以上）全体の平均時間（時分間）	中学生 全体の平均時間（時分間）
睡眠	9.19	7.47
食事	1.33	1.23
身のまわりの用事	53	58
仕事	02	04
学業	7.09	9.32
（授業・学校の行事）	5.26	5.59
（課外活動・自宅学習）	1.43	3.33
家事	20	25
（炊事）	03	04
（そうじ）	03	04
（洗たく）	00	01
（実用品の買物）	05	06
（家庭雑事）	07	09
交際	05	09
休養	20	24
レジャー活動	1.21	33
（見物・鑑賞）	02	04
（スポーツ）	16	10
（けいこごと・趣味）	05	06
（子供の遊び）	54	09
移動	52	53
新聞・雑誌・本	21	21
（新聞）	02	03
（雑誌・本）	20	18
ラジオ	01	24
テレビ	2.20	2.02

NHK「国民生活時間調査」1975年（昭和50年）
小学生（10歳以上）287人，中学生 266人

表5　小学校における授業時数

区分	各教科の授業時数								道徳の授業時数	特別活動の授業時数	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	音楽	図画工作	家庭	体育			
第1学年	272	68	136	68	68	68	—	102	34	34	850
第2学年	280	70	175	70	70	70	—	105	35	35	910
第3学年	280	105	175	105	70	70	—	105	35	35	980
第4学年	280	105	175	105	70	70	—	105	35	70	1,015
第5学年	210	105	175	105	70	70	70	105	35	70	1,015
第6学年	210	105	175	105	70	70	70	105	35	70	1,015

表6　中学校における授業時数

区分	必修教科の授業時数								道徳の授業時数	特別活動の授業時数	選択教科等に充てる授業時数	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭				
第1学年	175	140	105	105	70	70	105	70	35	70	105	1,050
第2学年	140	140	140	105	70	70	105	70	35	70	105	1,050
第3学年	140	105	140	140	35	35	105	105	35	70	140	1,050

「教育学大辞典3」（第1法規）1978年9月発行

対象群の中の昭和34年生まれの者が小学校２年生ないしは３年生の時のテレビの視聴時間は，ＮＨＫ総合放送文化研究所の実態調査（昭和42年11月～12月，静岡市の小学３年，４年，中学１年とその母親8,577人を対象）では，平日は２時間21分，土曜日は２時間52分，日曜日になると４時間２分に達している(18)。これは学校にいっている時間，睡眠時間などを除いた子どもの余暇時間の75パーセントになる(18)。

因みにＮＨＫ放送世論調査所が昭和54年８月に行なった調査によれば，小学校６年生，中学校２年生のテレビの視聴時間は表４の１のとおりであり（平均平日視聴時間２時間11分，土曜，日曜の長視聴時間との平均をとれば１日平均約２時間30分である。テレビ視聴のこの時間は，昭和40年代とほとんど同じである。参考までに，昭和50年の子どもの生活時間は表４の２のとおりである。），１年間では912時間30分となる(20)。

これを表５，６の小・中学校の総授業時間数（学校教育法施行規則に総授業時間数は，小学校６年生で1,015時限，中学生は1,050時限。ただし１時限は45分であるから，それで換算すると，実際の時間は，小学６年生で761時間15分，中学生では787時間30分となる）と比較すると，年間累計では，小６・中２ともテレビの視聴時間が学校の総授業時間数を大きく上回っている(20)。

テレビという映像文化の家庭内において占める役割りの大きさは想像以上であろう。

２．結果と考察

(1) 活字文化から映像文化への変移が性格形成にどのような影響を及ぼしたかを，Ｙ－Ｇ検査を通して検証していくわけであるが，まずＹ－Ｇ検査の構成因子を明らかにしておきたい。

Ｙ－Ｇ検査を作成した辻岡は，Ｙ－Ｇ検査によって測定される12の性格特性を次のように記述している(21)。

Depression：

たびたびゆうつになる，理由もなく不安になることがあるなどの，陰気な，悲観的気分や，罪悪感の強さを示す特性。

Cyclic Tendency：

気が変りやすく，感情的で，物事に驚きやすい情緒不安定，気分変易性の強さを示す特性。

Inferiority Feelings：

劣等感に悩まされる，自信の欠乏などの自己の過小評価，不適応感の強さを示す特性。

Nervousness：

神経質で心配性，いらいらするなどの，ノイローゼ気味の強さを示す特性。

Lack of Objectivity：

ありそうもないことを空想する，ねつかれないなどの空想性，過敏性，主観性の強さを示す特性。

Lack of Cooperativeness：

不満が多い，人を信用しないなどの不満性と不信性の強さを示す特性。

Lack of Agreeableness：

気が短い，正しいと思うことは人にかまわず実行する，人の意見をききたがらないなど，攻撃的な強さを示す特性。この特性は，情緒不安定特性（D，C，I，N）と結合すると，社会的にも活躍する社会的活動性となる。

General Activity：

仕事が速い，動作がきびきびしているなどの肉体，精神面の両方にまたがる強さを示す特性。

Rhathymia：

人といっしょにはしゃぐ，何時も何か刺激を求めるなどの気がるな，のんきな，衝動的な強さを示す特性。

Thinking Extraversion：

これは深く物事を考えたり，たびたび考えこむくせがあるなどの，思索的，冥想的，反省的熟慮性傾向とは逆方向の，考えが大ざっぱでのんきな傾向の強さを示す特性である。

Ascendance：

会やグループのために働くなど，引込み思案でない，積極的な社会指導性，リーダーシップの強さを示す特性である。

Social Extraversion：

誰とでもよく話す，人と広くつきあうのが楽しみであるなど，社会的に対人接触を好む，対人的に外向的，社交的，社会的接触を好む強さを示す特性である。

しかし，企業経営における性格検査の必要性から，Ｙ－Ｇ検査の実践的臨床性を活用している江口恒男

表7　得点による性格特性の特徴

	Ⓐ 高得点の際の特徴	Ⓑ 低得点の際の特徴
D	神経の疲れがひどく，虚脱して“**やる気**”**がおきない心境**。	何の心配もなく，元気で満ち足りた心境。**楽観的自己満足**。
C	些細なことが気になって，気分が動揺している。**心配性である**。	平静かつ安定した心境で，**心配性ではない**。
I	**自信がない**ビクビクして優柔不断な心境。	**自信に満ち**，明るく積極的な心境。**自信家**。
N	**神経がいらだち，不満が多い**心境。	晴ればれとして開放的。**神経質ではない**。
O	些細なことが気になって仕方がない，不安定でイライラした心境であり，**冷静客観的に物ごとが判断できない**。	穏健で満ち足りた，快適な心境であり，冷静に常識的に**現実を直視**し，**ドライ**に判断を下すことができる。
Co	現在の自分は不遇（不運）な，満足できない心境にあり，他人を信用する気持には到底なれない。**対人不信感が強い**。	満ち足りた幸福な心境。善意**協調的**だが，ときには**他人との協調に気をつかいすぎる**こともある。
Ag	活動的で好奇心も旺盛。強い**自尊心**にささえられてテキパキと決断し行動する。不正に対しては断乎として糾弾し，ときには**攻撃的**に**怒る**こともある。	**自己卑下**が強く，とかく事なかれ主義の保守的姿勢をとりがちである。**怒るべきときにも怒れず，ファイトがわかない**。
G	自分は敏腕で能率がよい，という自信にささえられて，現在の心境は極めて快適である。周囲の人との人間関係も非常に良い。**行動的（活動的）**。	「自分は不器用で能率が悪い」という意識が，当人を陰気にし，行動を不活発にしている。どちらかというと**理屈が多い**。
R	活動的で好奇心も旺盛だが，調子に乗りすぎて軽薄な行動に走ることもある。**軽卒（向うみず）**。	**必要以上に慎重**で，**優柔不断**である（**決断力が弱い**）。沈滞ムードで，陽気な気分にはほど遠い心境。
T	万事楽観的で安易に妥協しやすく，思い悩むようなことはない。少し用心深さが足りないようである。**無頓着（のんき）**。	悲観的で**些細なことを気にしすぎる**。クヨクヨ考えすぎて行動も不活発である。
A	自信家で，どちらかというとお節介やきである。**指導者意識が強く**，多弁で，活発に行動する。**自己顕示欲**。**お山の大将**。	自信がなく，**引込み思案**である。他人に引きづられることが多く，**指導者意識は弱い**。
S	**社交的**かつ派手好きで，口数も多い。誰とでも気軽に話し，くったくがない。	口数が少なく，**人嫌い（非社交的）**であり，性格は地味。引込み思案で，自信もない。

表8　因子別性格特性の要約

低スコアの性格特性		高スコアの性格特性	
d	自己満足，楽観的	D	元気がない，虚脱し（やる気をなくし）やすい
c	心配性ではない	C	心配性，気が小さい（小心）
i	自信が強い，自信家	I	自信欠如，劣等感
n	神経質ではない	N	神経質，不満をもちやすい
o	現実主義的，ドライ，常識的	O	現実ばなれをした考え方，分裂思考
co	他人との協調に気をつかう	Co	対人不信感，他人が信用できない
ag	自己卑下，ファイトがない，怒れない	Ag	自尊心，攻撃的，怒りやすい（怒りっぽい）
g	理屈っぽい，幻滅感がある	G	行動的（活動的），キビキビ動く
r	慎重すぎる，決断力が弱い	R	気軽，軽卒，向うみず
t	些細なことを考えすぎる（気にしすぎる）	T	無頓着（のんき），安易に妥協しやすい
a	引込み思案，指導者意識が弱い	A	指導者意識，自己顕示欲，お山の大将
s	社交性が低い，人嫌いの傾向	S	社交的，派手好き

図表 1　性格因子の特性（高得点）

No.	特性＼因子	D	C	I	N	O	Co
1	虚脱感	●				⊙	
2	自信欠如	○		●	○		
3	神経質	○		○	●	⊙	
4	倦怠感	○					
5	閉鎖的(悲観)	○					
6	小心(心配性)		●	○	○	⊙	
7	集中力欠如		○				
8	お天気屋		○			⊙	
9	感情的		○				
10	消極的			○			
11	優柔不断			○			
12	劣等感			○			
13	事なかれ主義					⊙	
14	ロマンチスト					⊙	
15	分裂傾向					⊙	
16	対人不信感						●
17	不運(不遇)感						○
18	不満感				○		○

〔注〕各因子が高得点（右寄り）のとき，●⊙○印の傾向を示す。ただし●は最も現れやすい傾向，⊙は次に現れやすい傾向を意味している。

No.	特性＼因子	Ag	G	R	T	A	S
19	活動的	○	○	○	○	○	
20	果断(決断)	○					
21	攻撃性	⊙					
22	衝動的	○					
23	自尊心	●					
24	短気	○					
25	好奇心旺盛	○		○			
26	協調的		○				
27	敏腕(高能率)		⊙				
28	快活(楽天的)		⊙	○			
29	順応的		○				
30	多弁(お喋り)			○		○	○
31	軽卒(気軽)			●	○		
32	開放的(楽観)				○		○
33	非思索的			○	●		
34	無頓着(のんき)				⊙		
35	自己顕示					●	
36	世話好き					○	
37	自信家					○	○
38	指導的					○	
39	社交的						●
40	派手好き						○

図表 2　性格因子の特性（低得点）

No.	特性＼因子	d	c	i	n	o	co
1	充実感	●				⊙	
2	自信家	○		●	○		
3	楽天的	○		○	●	⊙	
4	元気	○					
5	開放的(楽観)	○					
6	大胆(安心感)		●	○	○	⊙	
7	集中力旺盛		○				
8	穏健		○			⊙	
9	冷静		○				
10	積極的			○			
11	果断(決断)			○			
12	優越感			○			
13	攻撃性					⊙	
14	現実主義					⊙	
15	安定的					⊙	
16	協調的(善意)						●
17	幸運感						○
18	満足感				○		○

〔注〕各因子が低得点（左寄り）のとき，●⊙○印の傾向を示す。ただし●は最も現れやすい傾向，⊙は次に現れやすい傾向を意味している。

No.	特性＼因子	ag	g	r	t	a	s
19	行動不活発	○	○	○	○	○	
20	優柔不断	○					
21	事なかれ主義	⊙					
22	慎重	○					
23	自己卑下	●					
24	気長	○					
25	現状維持的	○		○			
26	非協調的		○				
27	不器用(非能率)		⊙				
28	陰気(幻滅感)		⊙	○			
29	批判的		○				
30	無口			○		○	○
31	熟慮(重厚)			●	○		
32	閉鎖的(悲観)				○		○
33	思索的			○	●		
34	警戒心				○		
35	引込み思案					●	
36	不干渉主義					○	
37	自信欠如					○	○
38	非指導的					○	
39	非社交的						●
40	地味						○

は，辻岡の上記の性格特性の表現用語のうち，抑うつ性（D因子），客観性（O因子），のんき性（R因子）等の因子の解釈上のあいまいさと各特性因子のもつ内容表現の不備を指摘し，次のような手続きによって，図表的に性格特性をまとめている。

すなわち，各因子の質問項目別に，得点の高得点（Ⓐ）と低得点（Ⓑ）の場合について，それぞれの項目のもつと思われる性格特性の特徴を氏独自の語句の表現によってより明確化し(表7，8)，各因子得点の高低に従って，彼によって設定された40の特性の中での出現度に基づき，実際上の性格診断を解釈的な面から，より容易にしようとしている（図表1，2）。

江口のこの図，表は，本研究の結果の考察において，大いに参考となると思われるのでここに引用しておきたい。

(2) 活字文化から映像文化への家庭環境要因の変移が，性格形成に与える影響について。

① 活字文化,映像文化のもつそれぞれの特性(前述）から，性格形成上もっとも変化を受けると推測されるY－G検査の構成因子は「R」因子であろう。

すなわち，映像文化においては，外的刺激に対する，思考不足に伴う瞬間的な「感覚反応」の優位性は，〝活動的で好奇心も旺盛だが，調子に乗りすぎて軽薄な行動に走ることもある〟,衝動性の強い性格を形成すると予想される。

従って，仮説1の検証は，このR因子を中心にして行ないたい。

結果としては,表9のR因子の得点が示すように，比較群10.92に対し，対象群11.75であり，15年間の間に，0.83の得点上昇が行なわれている（有意差 $0.02 > P > 0.01$）。

この結果から，上記の仮説は一応検証されたと認めてよかろう。すなわち，予想どおり家庭における映像文化的環境は，思考欠如の瞬間的感覚反応の強い，衝動的人格の形成に拍車をかけていることはまず間違いないとみてよかろう。

ところで，このR因子については，本研究の対象者（芸術専攻者）は，映像文化の影響を未だ受けていないと思われる比較群（昭和20年～24年生）においても，かなり統制群に較べると表10の示すように得点が高いのである（統制群9.10，比較群10.92)。つまり，芸術専攻者は，もともとこの性格特性が強いことは,「人格形成を規定する要因分析（Ⅰ）－芸術専攻者の性格特性について－」(23)でも明らかにしたが，それにしてもその後15年間に更にR因子得点が0.83も進行し，対象群と統制群との間になると，その得点差は2.65にも上り，芸術専攻者のR特性は一般の者と比較してますます顕著になりつつあるようである（有意差，$P < 0.001$）。

南博がいみじくも，テレビの間接具体性，間接行為性の特性に基づいて,「テレビ的人間では，実証精神に欠けているだけでなく，その代りに印象精神が発達してくる。実証的批判精神のかわりに，印象的批判精神，つまり印象批評者のパーソナリティが培われるようになる。それは，対象の全体認識ではなく，角度からする対象の部分認識をもって，あたかも全体認識であるかのように思いこむ知的習慣，パーソナリティのなかに沈澱した結果である。そこから生れるのは，独断性のたかい，無反省のパーソナリティ習性である。」(17)と述べているが,このことは,芸術専攻者の人格特性の解明に，まことに鋭い示唆を与えるものといえよう。

② 研究目的の仮設2に基づき，美術専攻者と音楽専攻者別に構成因子得点を明らかにしたのが表11，表12である。

R因子に関する上記の問題点を，美術，音楽各専攻者別に比較すると，美術専攻者は，R因子得点が比較群11.05，対象群11.73であり，15年間にR因子の得点上昇は0.68であるのに対し，音楽専攻者は，比較群10.65，対象群11.78であり，15年間に1.13という得点上昇を示し,得点進行の度合いからみれば，音楽専攻者は美術専攻者の約2倍弱にも上っている。

この結果からみれば，活字文化から映像文化への家庭環境の変移が人格形成に与える影響は，視覚文化を専攻する者より，聴覚文化を専攻する者に対して，より大であるといえよう。

美術専攻者は，活字文化の中にあっても，もともとR因子得点が高い（比較群11.05）のに対し，音楽専攻者は活字文化の中で育った範囲内では，統制群の9.10（表10参照）に較べると高い（比較群10.65）とはいえ，美術専攻者ほどではない。

つまり，活字文化の中にありながら，造型映像を

表9　群別因子得点

群＼因子	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
(A) 対象群	11.22	10.76	9.64	9.91	8.93	6.53	10.43	10.80	11.75	9.37	9.99	13.42
(B) 比較群	11.01	11.11	8.51	9.34	8.91	6.55	10.82	11.66	10.92	8.86	9.29	11.73
(A)−(B)	0.21	−0.35	1.13	0.57	0.02	−0.02	−0.39	−0.86	0.83	0.51	0.70	1.69
有意差			※※※					※※	※※		※	※※※

（※：0.05＞P＞0.02，※※：0.02＞P＞0.01，※※※：0.01＞P＞0.001）

表10　群別因子得点（統制群との対比）

群＼因子	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
対象群	11.22	10.76	9.64	9.91	8.93	6.53	10.43	10.80	11.75	9.37	9.99	13.42
比較群	11.01	11.11	8.51	9.34	8.91	6.55	10.82	11.66	10.92	8.86	9.29	11.73
統制群	11.73	10.33	9.00	9.76	8.36	6.88	10.45	10.70	9.10	8.08	8.42	10.40

表11　群別因子得点（美術専攻者）

群＼因子	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
(A) 対象群	11.59	10.93	9.67	10.06	9.43	6.43	10.75	10.74	11.73	9.34	10.08	13.32
(B) 比較群	11.22	11.19	8.29	9.32	9.09	6.64	11.26	11.67	11.05	8.79	9.29	11.68
(A)−(B)	0.37	−0.26	1.38	0.74	0.34	−0.21	−0.51	−0.93	0.68	0.55	0.79	1.64
有意差			※※※	※※				※※※	※		※※	※※※

（※：0.1＞P＞0.05，※※：0.05＞P＞0.02，※※※：P＜0.01）

表12　群別因子得点（音楽専攻者）

群＼因子	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
(A) 対象群	10.68	10.52	9.60	9.67	8.20	6.69	9.98	10.89	11.78	9.43	9.87	13.57
(B) 比較群	10.60	10.95	8.94	9.39	8.58	6.36	9.93	11.65	10.65	9.00	9.28	11.83
(A)−(B)	0.08	−0.43	0.66	0.28	−0.38	0.33	0.05	−0.76	1.13	0.43	0.59	1.74
有意差			※					※※	※※※		※	※※※

（※：0.1＞P＞0.05，※※：0.05＞P＞0.02，※※※：P＜0.01）

主体とする視覚文化の影響を大きく受けて育ったと思われる美術専攻者は，元来R因子得点が高い性格構成となるのではなかろうか。従ってテレビの瞬間映像を主体とする映像文化への環境移行に伴っても，R因子については，それほど大きい影響は受けないのではなかろうか(15年間のR因子得点の進行0.68，有意差0.1＞P＞0.05)。

これに対し，音楽専攻者は活字文化の環境条件下では美術専攻者ほどの映像刺激が少なく，従って活字文化から映像文化への環境移行に伴うR因子得点の進行の度合は1.13にも上り（P＜0.001)，映像文化の影響の受け方の強さの相違がはっきりと示されている。このことから研究目的の仮設2も，十分検証されたといえよう。

表13　年度別性格特性得点

特性＼年次	昭和40年	41年	42年	43年	45年	46年	……	54年	55年	56年	有意差あり
D	11.02	10.83	11.17	11.26	11.77	11.56		11.08	11.28	11.28	
C	11.21	10.91	11.23	11.29	10.80	11.44		10.34	11.64	10.30	
I	8.82	8.08	8.68	9.18	8.82	9.26		9.01	9.89	9.97	※
N	9.64	9.04	9.40	10.09	10.19	10.38		9.27	10.18	10.25	
O	9.13	8.24	9.40	8.87	9.80	9.39		8.48	9.34	8.92	
Co	6.74	6.70	6.25	6.88	7.27	7.20		5.79	7.07	6.69	
Ag	10.78	11.14	10.54	10.96	10.68	10.93		9.94	10.66	10.67	
G	11.84	12.05	11.16	10.80	10.97	11.05		10.71	10.88	10.80	※
R	10.82	10.71	11.19	11.14	10.88	11.31		11.32	12.02	11.75	※
T	8.72	8.70	9.12	8.98	8.38	8.97		9.05	9.69	9.35	
A	9.14	9.94	8.78	9.06	8.81	9.10		10.55	9.50	9.97	
S	11.47	12.34	11.35	11.75	11.14	11.83		13.82	12.93	13.53	※

ただし芸術専攻者以外の一般対象者としての統制群の時代的経過に関する特性得点の変化の資料がないため，芸術専攻者と昭和54～56年の一般対象者との比較が仮説1，仮説2に関してできなかった。

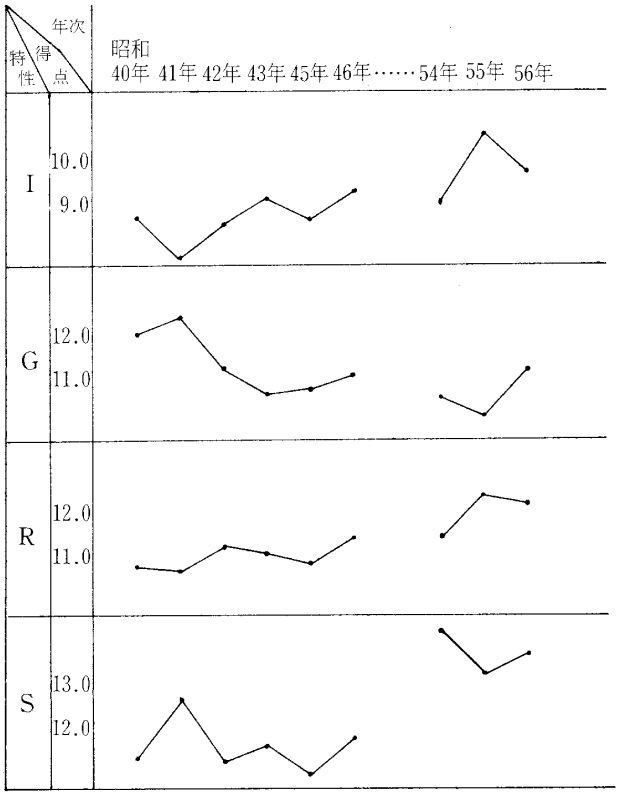
③　活字文化から映像文化への移行によって，大きく規定される性格形成上の因子は理論的にみてR因子であろうと予測し，ほぼその予測は結果の検証によって裏づけられたのであるが，比較群から対象群へと15年間の経過を経て予想しえなかった因子に得点上大きな差が生じている。

差の検定の結果からみれば，比較群と対象群との間に明確に差があるものは，表9が示すようにR因子以外では，プラスの進行では，I因子（1.13，$P<0.01$），S因子（1.69，$P<0.01$），マイナス進行ではG因子（-0.86，$0.02<P<0.01$）である。

この結果は，活字文化から映像文化への移行によって，〝社交的かつ派手好きで，口数も多く，誰とでも気軽に話し，くったくがない〟(22)が，一方では，〝自発的，自主的，自立的な自信にささえられた行動に欠ける，どちらかといえば自信のない優柔不断な，それ故に理屈の多い〟(22)性格特性が生み出されていることを示している。

因みに幼児・児童期を活字文化の中で育ったと思われる昭和40年から46年（44年を除く）までの7年間のそれぞれの年度にY－G検査を受けた対象者と，映像文化の中に育った54年から56年までの3年間のそれぞれの年度にY－G検査を受けた対象者の，年度別性格特性の得点変化を比較して示したものが表13であり，両者の得点間に有意差のある特性因子（I，G，R，S因子）の推移を図にしたのが図3である。

図3　年度別性格特性得点の推移



R因子を除き，他の性格特性因子の得点変化が，即「活字文化」から「映像文化」への移行によって，その性格形成上の規定を受けて生じたものであると意味づけるのは，両文化の性格形成に及ぼす心理的メカニズムの観点から，現時点の資料のみでは理論

的に結論づけ難いが，何らかの影響を受けていることは推測される。この問題は今後の研究課題となるであろう。

IV 要　約

本研究は「人格形成を規定する要因分析」の一環であり，今回は家庭における文化的環境要因の変移が，性格形成にどのような影響を与えるかを明らかにしようとした。

文化的環境要因の変移を，「活字文化」より「映像文化」への転換とし，Y－G検査の結果（特にR因子）と関連して調査したところ，次の点が明らかとなった。

1．映像文化のもつその特性上から予想したとおり，「R因子」の得点上昇がみられ，しかも上昇の度合いは，造型映像刺激が美術専攻者より少ない音楽専攻者の方が大きかった。

2．予想しなかった性格特性因子（I，G，R，S因子）の得点に時代的変化が大きくみられたが，これが直ちに文化的要因の変化によるかどうか，もしそうであるとすればどの程度の影響度であるかは，今回の資料だけでは即断できないが，このことは時代的変化の度合いの余りの大きさからみて，今後の重要な研究課題である。

引用文献

(1) 高木正孝：〝遺伝と環境〟「脳研究」1950

(2) 〃 ：〝人格の遺伝性〟「文部省科学研究書研究報告」1951

(3) ローラッヘル・宮本忠雄訳：「性格学入門」1959

(4) 高木四郎他・内村祐之編：〝双生児のパーソナリティ形成に及ぼす身体的ハンディキャップの影響について〟「双生児の研究」1956

(5) 時実利彦：「脳と人間」1970

(6) 〃 ：〝情操・意志・創造性の教育〟「教育学叢書，第20巻」1968

(7) Whiting,John W.M & I.L.Child：「Child training and personality」1953

(8) 田口孝之・徳田安俊：〝家庭の雰囲気について〟心理学研究30，1959

(9) 宮城音弥：「日本人の性格」1969

(10) 戸川行男他編：「性格心理学講座第2巻」1967

(11) 中西　昇：「親子関係の心理学的研究」，教育心理学研究6，1959

(12) 詫間武俊編著：「性格の理論」1967

(13) 朝日新聞 昭和34年3月12日号

(14) 木原健太郎編著：「テレビと学力」1966

(15) 波多野完治編・寺内礼治郎著：心理学入門講座「マスコミの世界」1966

(16) 西原達也・巽健一著：「マスコミと大衆社会の心理」

(17) 南　博著：講座2「現代マス・コミュニケーション・テレビ時代」1960年

(18) 志賀信夫：「テレビ人間考現学」1970年

(19) 阪本一郎編著：「現代の読書心理学」1971

(20) ＮＨＫ放送世論調査所編：「日本の子どもたち－生活と意識－」1980

(21) 辻岡美延：「新性格検査法」1965

(22) 江口恒男：「性格診断マニュアル」1979

(23) 高橋正臣：大分県立芸術短期大学研究紀要第9巻，Vol.IX，1971